

タイトル：まだ見ぬ世界は君の手で

著者名：粟生深泥

あらすじ：“俺”は仕事後に立ち寄ったカフェで偶然職場の後輩の真希の隣になり、ひょんなことから真希が休止してしまったライトノベルの二次創作を書いていることを知る。そのライトノベルは、“俺”がかつて執筆していた作品だった。真希の二次創作を読んだ“俺”は設定ノートとともに作品と続きを真希に託す。

概要：かつて仕事等で筆を折ってしまった主人公が、自らの作品の二次創作を書いていた後輩に作品の続きを託す。

本編の文字数：5,000 字

「うわ……」

仕事終わり、職場から少し離れた海沿いのレストランカフェに立ち寄ると、職場の後輩である柳川真希の気まずそうな顔を見かけた。そりゃあ、仕事が終わって自分の時間になったのに、先輩と出くわしたら気まずいだろう。

俺だって、職場の外でまで後輩に気を遣わせたいとは思わない。だけど、混雑した店内で空いているのは真希の隣の席しかなかった。そして、もう俺の口はこの店のラザニアになっている。

「食ったらすぐ出るから、気にしないでくれ」

せめてできることと言えば、少しでも早くこの場所から立ち去ることだろう。本当は食後にコーヒーでも飲みながら、海を眺つつ本でも読んで帰りたいのだけど。この店からはライトアップされた海を渡る大橋が見えて、夜でも景色を楽しむことができる。

「はあ、わかりました……」

真希は曖昧に頷きながら、直前までいじっていたノートパソコンを俺から離れた位置にずらす。パソコンの隣には文庫本と思しきものが置かれていたけど、カバーがかけられていて詳細はわからない。あまりじろじろ見ていると不審がられそうなので、とりあえず目当てのラザニアとコーヒーを注文し、ビジネスバッグから文庫本を取り出す。

ここでこうして本の世界に溶け込んで仕事のことを頭から押し流すのが日課——とまではいかないけど、週に一回は時間を作るようにしている。

だけど、本を読み始めてから隣の真希からチラチラと視線を感じる。そっと様子を伺うと、コーヒーを飲むふりをしながら俺の手元を見ているようだった。ぱちりと目が合っ、そそくさと目を反らされる。

柳川真希は三年前に新卒として入ってきた後輩で、四個上の俺は上司と先輩の間くらいの立ち位置だった。仕事ぶりは真面目で優秀。仕事の関係では信頼して色々任せられる。ただ、仕事後はすぐに帰るから職場以外での人となりはよく知らない。上に気を遣って帰れないよりよほどいいと思うけど、まさか会話の糸口がつかめず困ることになるう

とは。

「ん？」

再び視線を感じて真希の方を見ると、すごい勢いで真希の顔がパソコンに向き直る。またこっちの様子を探っていたらしい。きっちりとしたビジネススーツとシャープなメガネ。仕事できる人のオーラを放つ真希の様子が今はなんだかおかしい。

うん、無理だ。隣に職場の後輩が座ってて仕事のことを忘れるとかできそうにない。それは隣でどこかわざとらしい顔でノートパソコンと向き合っている真希も同じだろう。完全にスルーしてくれていれば、それに合わせることもできたのだけど。

「それ、仕事？」

微妙な空気に耐えかねて尋ねてみると、パッと顔を上げた真希は更にパソコンの画面を俺から見えにくいように傾けた。

「い、いえ。仕事ではなく、プライベート、というか……」

「ああ、いや。仕事じゃなきゃいいんだ。何してるかまで聞く気はないよ」

職場の外にまで仕事を持ち帰らなきゃいけない状況なら、業務分担なんかを見直すべきかなと思って聞いてみたけど、確かに真希が操作しているのは職場で貸与されているものとは違うパソコンだった。

それはそれで、そこまで必死に隠そうとするのは何だろうと気になったけど、そこまで踏み込むのはマナー違反だろう。安心したように小さく息をついた真希が、再び俺の手元に視線を投げてくる。

「あの、それ、『カナエと星の守護者』シリーズですか？」

真希の質問におっと思う。ブックカバーをかけていたわけじゃないけど、真希から表紙を見ることはできなかったはずだ。となると、チラチラ様子を伺ってきた時に見えた挿絵か何かで判断したのか。

「ん、九巻。来月新刊が出るっていうから、おさらいしてる場所」

「面白いですよ、カナエと星の守護者！ 新刊出るってニュース見てびっくりしちゃいました！ 最後に新刊が出てから四年間が空いて、もう続きでないのかなって思ったから楽しみで仕方なくて、ですね……」

パッと笑顔が浮かんで捲し立てた真希が段々小さくなっていく。突然大きな声を出した真希の方に周囲の客の視線が集まっていた。小さく咳ばらいをすると、集まっていた視線が散っていく。

「柳川もライトノベル読むんだな」

カナエと星の守護者は十五年程前に発売されるや否や、当時はアニメ化や実写化など一台ムーブメントを呼んだシリーズだった。最終巻が出てからしばらく時間が空いてたけど、来月に新刊が出ることになって界限が俄かに盛り上がっている。

とはいえそれは界限の話で、真希がライトノベルを読むというのは勝手に抱いていたイメージと違っていた。

「結構読みますし、これもそうです」

真希は少し照れくさそうにノートパソコンの隣に置いてあった文庫本のカバーを外す。

——カルディアン勇者王国建国記

カバーの下から出てきた本に息を呑む。それは十年程前に人気を博したものの、五年前から新刊などの続報が一切途絶えたライトノベルだった。

「ご存じですか？」

「ああ、知ってる。けど、途中で投げ出されたシリーズだろ」

つい声が荒くなる。物語はいよいよ佳境というところで時間が止まってしまった。読者の期待を最悪の形で裏切った作品だ。

「私が初めて読んだライトノベルで、今でもお気に入りなんです。だから、ずっと続きを待ってるんですよ。このカフェも、主人公たちが通うカフェに似てるって聞いてから来るようになったくらいで」

「……けどもう、続きは出ないって」

俺の言葉に真希は寂しげな表情を浮かべて頷く。真希に当たっても仕方がない。真希だって作品に裏切られた読者の一人だ。

「わかってます。だから、自分でつい続きを書いちゃって」

さっきまでひた隠しにしていたノートパソコンの画面を俺の方に向ける。テキストソフトの画面には無数の文字が並んでいた。

「え？」

「あっ」

初めて見る朗らかな笑みを浮かべていた真希の表情がしまったという形で固まる。うん、わかる、わかるよ。同志を見つけたときに盛り上がっちゃう気持ち。

だからさ、俺は悪くない。そのプルプルと震える拳はしばらく膝の上に置いたままにしてほしい。。

*

翌日、工作中的真希は全く目も合わせてくれなかった。

仕事のメールやチャットはいつも通り返してくれるから業務に支障はないのだけど、気まずいことこの上ない。

だけど、隠れた一面を知ることによって普段の見え方も変わってくるから不思議だった。昨日までクールに見えていた真希が、今はどこか抜けた一面を持つ文学少女に見えてしまう。真希の方を見ていたのがバレたようで、ギロリとした視線が飛んできた。

首をすくめながらパソコン画面に視線を戻すと、真希からのチャットが届いていた。

『誰にも言ってませんよね？』

『言ってない言ってない』

途中で刊行が止まった作品の続きを書いているというのは予想以上に本格的だった。定期的に冊子化して即売会などで配布・販売を行っているらしい。

そこまでは教えてくれた真希だったけど、書いている作品を読みたいといったらすごい表情で睨まれてしまった。まあ、目の前で自分の作品を読まれるのが恥ずかしいのはわかるけど。

『誰かにばらしたら、先輩が職権乱用で無理やり言わせてたってことにしますから』

『言わないって……！』

パソコンに隠れるように様子を伺うと、真希は淡々とした表情で仕事をしていた。もしかしたら、俺はヤバい奴の秘密を握ってしまったのかもしれない。

終業時刻を示す放送が流れると、手早く荷物をまとめた真希が席を立つ。

辺りを見回し、誰も俺の方を見ていないことを確認して、それとなく真希の後を追う。

「真希、ちょっとこっち」

後ろから声をかけると、真希はこちらが驚くくらいビクッとして振り返り、それから警戒するような表情を浮かべる。

「な、なんですか」

「ほら、これ」

「……え、これって！」

そんな真希に渡したのは、カルディアン勇者王国建国記の主人公のアクリルスタンド。市販品ではなく、人気が出てきた頃に出版社主催で開かれたイベントで配られた限定品だ。真希はすぐにそれに気づいたようで、やはり筋金入りのファンらしい。

「いいんですか？」

「何となく捨てられずに持ってただけだし。今も作品を好きな人が持ってた方がいいだろうから」

躊躇いがちにアクスタを受け取った真希は、ペコリと頭を下げしてから大事そうにカバンの中にしまい込んだ。うん、真希なら大切にしてくれるだろうし、昨日収納の奥から引っ張り出してよかった。

「それとき、即売会前とか大変な時期は言ってくれよ。できる範囲で仕事も調整するから」

「流石にそれは申し訳ないです」

「即売会に向けて寝不足で仕事されるよりは、お互い Win-Win だろ」

真希は何か言いたそうに口をパクパクさせるけど、ギョッとカバンを握りしめるようにして頷いた。

「わかりました。そのときは、相談します」

「ん」

俺が頷いても、真希は少し下を見たまま動こうとしない。やがて、カバンの中に手を入れて何かを探し始めた。

「あの、これ……」

上目遣いがちに真希が差し出してきたのは、カルディアン勇者王国建国記の二次創作と思われる冊子だった。誰が書いたものかは聞くまでもない。

「いいのか？」

「しゅ、趣味のこと話せる人、先輩が初めてなので」

ありがたく冊子を受けとって開いてみると、個人製作とは思えないクオリティだった。

「わ、わ！ 今じゃなくて帰ってから読んでください！」

そう言い残して真希は逃げるように走り去っていった。

*

真希から同人誌を受け取った翌日、仕事でもチラチラと真希から視線を感じた。

目の前で読まれるのは恥ずかしいけど、読んでもらったら気になるのが物書きの性なのかもしれない。ということで、業務が終わると同時に仕事のふりをして真希を会議室に呼び出した。執務室を出るまでは「仕事ですよ」という顔をしていた真希が目に見えてソワソワしてる。

「スゴイよかった。本当にカルディアン勇者王国建国記の続編や番外編を読んでもる気がしたよ。ちゃんと設定が抑えられてるのはもちろん、キャラの考察も見事だった」

真希の作品は驚くほどしっかり練られたものだった。なんなら、表現ぶりや展開の運びは原作以上にも思えた。真希は何も言わなかったけど、俺の言葉にちょっと照れくさそうに頷く。

「だからさ、これ」

仕事の演技のようなフリをして持ってきたノート我真希に渡す。

真希は戸惑いがちに受け取ると俺の顔を伺う。読んでみるように頷いて促すと、ノートを開いた真希が息を呑んだ。

「これっ……カルディアン勇者王国建国記の設定にプロット？ なんて……っ！」

大切なものに触れるようにノートを撫でた真希が顔を上げる。

「まさか、先輩が……」

「うん。その作者だ」

大学生の頃に小説投稿サイトで書いていた作品が書籍になり、あれよあれよと人気になった。その頃は自由な時間多かつたし、サイトで書き溜めていた分もあったから数か月に一冊ペースで刊行できていたのだけど、就職して状況が変わった。

仕事で疲れて全く書けないような日々が続く、刊行間隔が空き、少しずつ書き方を忘れていった。そして、そのまま書けなくなって、筆を折った。

「そのノートは好きにしてくれていい。次の即売会のネタに使ってくれても、帰りにシュレッダーにかけても構わない」

「どうして、私に……？」

「俺にはもう書けないけど、未練がないわけじゃないんだ。だから、少しでも可能性を残したいのかもな」

五年も前に作者が失踪した作品を未だに好きでいてくれるどころか、その作者を唸らせる作品を書いている真希。そんな真希に作品の行く末を託してみたくなったのかもしれない。

いや、もっと単純で、当時書きたくて書けなかった続きを読んできたいんだ、俺は。真希はギョッとノートを抱きしめてから、決意を固めたように顔を上げる。

「ダメです」

「え」

まぬけな声が飛び出してしまった俺に対し、真希は「わかってない」とでも言いたげにため息をついた。

「私が好きで続きが読みたいのは、先輩が書いた続きなんです。私だけで書いたら、私が新作を楽しめないじゃないですか」

「え、は……？」

「だから、一緒に書きましょう、先輩」

戸惑う俺の手を掴むと、ニッと勝気に笑った真希はノートを持ったままどこかへ引っ張っていかうとする。

「えっと、どこに？」

「決まってるじゃないですか。新作の相談です。いつものカフェに行きましょうか」

——長年休止されていた作品の新刊が発売されるのは、もう少しだけ先の話。